

保育への視座(8)

——若い保育者の方々へ——

河邊 杲

幼児が友だちや保育者に対して憤^{むずか}るときや無理難題のようなことをなげかけて来たりするとき、これをひとつの「自己表現」として受けとめることができているだろうか。

K幼稚園の四歳児クラスで登園早々にA子、Y子、M子、E子、MH子女児五人が製作コーナーのところに集まり何か作っている

など思っていると、突然MH子が大きな声で泣き出した。その側でY子がMH子の顔をのぞきこみながら「ね、いいでしょう順番やで」とくりかえしていた。

担任が「どうしたの？」と声をかけてみるとY子が「あのね、MHちゃんが、三番いややっていうの」担任「何の順番なの」

M子「あのね、Aちゃんに魔法のステッキ
作ってもらおう順番なの」

Y子「きのうMHちゃんが一番やったで、
きょうは三番になったの」

E子「私きょう一番なの」

Y子「私が二番でMHちゃん三番でMちゃん
が四番んだけどMHちゃんいややってい
うの」

担任「毎日順番決まってるの」

Y子「うん交替っこしてるんや」

担任「魔法のステッキってAちゃんに作って
もらわないとできないの？」

Y子、E子、「うん」

(どんなステッキかと担任が見ると割ばしの
先に色紙の丸形がつけてあって、その中に何
やらマークらしきものがフェルトペンで書い
てあった)

担任、「これでしょう。みんな時々自分一人

で作ってるじゃないの」

Y子「だってね、ここんとこちが難しいも
ん、Aちゃん上手やで、作ってもらおうの」

(ここんとこちとは色紙に書いたマークのよ
うなところを指している。担任は何でも好き
なものを書けばよいのに、どうしてむずかし
いと言うのかなと思った)

担任「だってこれぐらいだったらYちゃんた
ち、絵が上手やで書けるでしょう」

E子「Aちゃん上手やもんね」

と仲間に同意を求めるように言う。このよう
なやりとりをしている間にMH子の涙も消え
ていたので、

担任「そんなにAちゃんにやってもらいたい
のなら上手に順番守って作ってもらって。

先生は自分でかいたって上手に書けると思
うんだけどな」

と、解決ともならないようなことばかけをし

て、その場を離れてしまわれたのである。

*

その日の担任の省察によると、最近になってA子に作ってもらうため順番に待つ姿が見られて担任は気にされていた。ちょうどMH子が泣いたので、よい機会と思い声をかけてみられたのだが、担任のことばかけは子どもたちの耳に入らなかったようだった。担任としては、A子の表現のすばらしさを認めつつも、まわりの子どもたちがそれに誘発されて、*“自分でもやってみよう”*という姿勢になってくれればというねがいをもたれていたのだが、この子どもたちはA子に作ってもらうことで満足感もち、それぞれが自分でやってみようという意欲がなかなか持てないことについてどうすればよいのかを指導の課題として持たれていたように思われる。

この保育の事実と担任の省察等から三つのことについて考えてみたい。

まず第一は保育の事実の中で子どもたちの活動状況をどう保育者がとらえるか、ということであり、日頃保育者が心を一番使われるところであろう。この日の保育でも保育担任者が省察で問題にされている通り、A子に依存して自分たちの力で表現しようとしていないでいる四人の子どもたちの活動についてなんとかならないものかという課題をもたれたことは保育者の一つの見方として理解できる。またこうした見方も多くの他の保育者に支持される見方であるかも知れない。しかしよくこのことについて考えてみると、それは評価的な見方であり、こうした見方で子どもに接することは否定的な態度で子どもにも臨むことにもつながる。

さらにこうした評価的・否定的な保育の姿

勢でいると、いま・ここに起きているあるがままの事実が見えてこない。また見ようと努めないことにもなる。つまりひとりひとりの子どもの動きが新鮮に保育者の眼にうつらないのである。この場面と言うと、担任教師が指導（援助）しなくては子どもたちと出会われたのはMH子が「三番はいやや」と泣いていてY子がこれを一生懸命にだめている場面であるが、このMH子の心持ちやこれをだめていたY子の心持ちと、この二人の關係については、何もふれられていないことである。

担任の先生の指導しなくてはと思われている内容については子どもとの対話の中によく伺い知ることができるが、そこに起きている子ども相互の人間關係が見えていないように思われる。

第二は、担任が気にされているA子とそれ

をとりまく四人の子どもたちとの關係についてであるが、担任の眼にはA子に依存的であり、とりまく四人の自発性・独自性・創造性の面が働いていないことを少し視点をかえてみると、二年保育の四歳児の二学期の中期頃、A子に対して私を助けてくれる人、力を貸してくれて安心できる人という思いが生じつつあり、A子自身もまわりの四人に助けてあげられる自信や皆から信頼されようとしていることを確認しつつあり、そこにそれぞれの存在感を感じつつあることも感じとれる。またA子をとりまく四人の相互が、かいてもらうという欲求をめぐって「順番」という新しい秩序づくりを発見し「交替してやっているのだ」と誇らしげに担任に報告しているなど、また、子どもたちがつくりつつ学びつつある人間關係がここに見えていることは見逃すことができない。

第三は、このように子どもの活動を見るということは、従来から保育方法で考えられて来た、担任教師が困ったことと見たところでこれをどうすればよいかというような、如何にも操作主義的とも言える態度で保育に臨むのではなく、ひとりひとりの行為を自己表現として受けとめ、このメッセージを如何に受けとっていくかという関係のとり方（かかわり方）において、保育を實踐していかなくてはならないということである。「三番いや

や」という泣きながら憤^{ちが}っている子どもや、その気持ちにより添うようにこれを一生懸命なだめている子どもの活動が一つの自己表現と見えてくれば、当然その心持ちに即してレスポンス(Response)しなければならないはずである。

保育をこうした表現とその理解、及びその受けとめといった関係の面から見直してみよう。

(元・洗足学園短期大学)

